

## 英語教育への変形生成文法の利用

—— 読解作業での一つの試行 ——

菅 沼 惇

## I あるテスト結果の分析

前年度の試験問題の中に、また他日色々と分析してみる場合の資料の一つにもなるかと考えて、解釈問題の一部に、学生の読解力即ち英文に対する判断力あるいは判断傾向をかなり把握出来るような一応の長文を入れておいた。ここで長文というのは、その前にも後にも休止があるような単一の独立文のことである。この問題文は長文とは言え、使われている単語38語のどれを見ても、少なくとも標準の大学生にとっては、それがむずかしくて即座の判断が出来にくいと言えるような語など一つもないと言ってよい程のものである。そのこともまたこのテストの用意された特徴の一つでもあったのである。

その問題文は次の文である。

英文例 1.0 Children who are instructed in what to call things and are corrected when they do not name objects in the same way that their parents do often come to believe that there are correct names and in correct names. (J.C. Condon: *Words, Words, Words*..., 成美堂)

そのテスト結果について説明すると次の通りである。先ず取得点数等について表で示す。

この表1から分ることは、全被検学生49名の中で、この問題文を普通どおりに読解出来た学生は10~10数名で、半分以下だけか読解出来ていなかったと思われるのが9名、殆んど読解出来る所がないくらいなのが8名、完全に読解出来なかったのが16名であったということになる。この終りの二つの段階を合わせると24名となり、約50%即ち教室全学生の半数が殆んど全然と言ってよい程読解出来なかったということになる。そういう方面の更なる調査研究も重要で

表 1

取 点	得 数	人 数	
20	6	10 (20%)	16  (33%)
19	4		
17	2		
16	2		
14	2	4	9
11	3		
9	1		
8	1		
7	1		
6	3	5	24
4	2		
3	6		
0(誤答)	12	16 (33%)	(49%)
0(無答)	4		
		49	

註)  
満点=20点。  
(但し実際には14点満点で出題されていたが、  
相対的比較の判断の容易さを促す為に20点満点  
に換算されている。)

あるが、本稿ではその方面の問題は特に取扱わない。本稿ではむしろ、11点とか8点とかの得点者で、その中にどういう性質の誤答があったかというような問題を少しばかり検討した上でその次の問題へ入ることになる。

19点~14点までの得点者の解答は当然のことながら主筋の読解力の問題はなく、細部の表現力とか僅少程度の誤解等による減点を含むだけに過ぎないので、もっと大きい減点をもつ解答例から選んで、どういう点で間違っただけか次に示す。

解答例1-1 「物事の呼び方というものに通じている子どもたちは、彼らの両親と同じ方法で物を名のらないときはきょう正させられ、正しい名まえとまちがった名まえがあるということをししばしば信じるようになるのです。」

(11点)

解答例1-2 「子どもたちは、両親がしている同じ方法でもって、物事に名前をつけないとき、物事をどう呼ぶか教えられるまた正確に身につけられた子どもは、ししばしば正しい名前またまちがった名前があるというふうに信じるようになる。」(9点)

解答例1.3 「彼らの両親が正しい名前とまちがった名前が存在することをし  
しばしば信じるようになったと同じ方法で、対象物に名前をつけなくなった時  
ていせいされ、物を何と呼ぶべきかわからなくなった子供達、」(6点)

解答例1.4 「子供達が 一つの物を同じ名前で呼べない時、その物の名前を言  
って正しい時まちがった時があると、彼らの両親はしばしば正しい名前とまち  
がった名まえが存在するのかと信じてしまう。」(0点)

ここで一応一つの正解例を、参照の為に出しておく。

正解例1 「物事を何と呼ぶかということで教育を受け、両親と同じように物  
事と呼ばない時は直されている子供は、しばしば物の名前には正しいものと  
正しくないものがあると思うようになる。」

以上のように色々な性質の誤答例があるが、それらがそれぞれどのような  
な点で間違ったのかを、最初に挙げた問題文の英文例1に照らして検討して行  
くことにする。

解答例1.1は、

英文例 1.1 Children who are instructed in what to call things [and]  
are corrected when they do not name objects in the same way that  
their parents do and often come to believe that there are correct  
names and incorrect names.

というような流れの文に誤解され、あるべき処の [and] は無視され、ないは  
ずの and を想像したかのような誤解が行なわれ、更にまた instruct の語義  
の誤解が僅かにあったということになる。

解答例 1.2は、when they do not name…… を are corrected には関係  
させないで who are instructed in what to call things に関係させ、更に  
and corrected は別個に考えているようである。

解答例 1.3は、their parents do と often come to believe……の間が関  
係がないのに、そこを関係させてしまって、結局は体言止めの文にしてしまっ  
たことになる。これも英文読解作業において日本人がしばしばつり込まれそう  
になる典型的例と言えよう。

解答例 1.4は、これも一部で解答例1.3の誤解と全く同じことをやってい

るが、その他ではもうどうにもこうにもならない誤解をやっている。このような殆んど全くナンセンス文と思われるような解釈をしたのが12名(24%)もいるのである。

良い方の例では、これは解釈例を出す必要は全くないが、注意すべきは彼らの答案の英文の方に書き込まれた記号や線や文字である。それらは、彼らがこの英文に対してどのような反応を頭脳の中でなして行ったかを判然と示すものとして、極めて重要なものと言わなければならない。それは次のような例である。

英文例1-2 ① Children who are instructed in what to call things and ②  
are corrected (when they do not name objects in the same way  
 that their parents do) / often come to believe that there are  
 correct names and incorrect names.

③

(11点取得者の1人)

このような英文の整理が出来る学生は当然その英文の読解は出来ているわけであるし、またそのような英文の読解が出来る学生はそのような英文の整理も出来るはずである。そういう整理がよく出来ている割には取得点数が非常にはよくない学生もいたということは、それはまた何か別の要素があったことによるかもしれない。今挙げた例が最も手が込んでいるが、同じような例が3~4例あり、8点以上の得点者21名の中8割が何らかの方法でこの筋道の連絡を大なり小なりに整理していた。

このように学生が複雑な英文の筋道を整然と整理した有様に接すると、いわゆるなつかしい往時の英文解釈の伝統的方法が回想されるであろう。今の世の中ではかなり複雑な英文でも、昔のように文末の方からひっくり返ったり、あちこちと廻りながらごつごつと、いわゆる解釈の為の解釈のようなことをすることは敬遠される傾向にある。「英文解釈」などという言葉に対して過度なまでの不信の傾向がある。吾々がなすべきは、英米人もするであろうように、語が左から次々に右へと見えて(あるいは時間的に次々と聞えて)くるに従って理解して行くように習慣づけられて行かなければならないのである。今

や英語に対する日本人の最先端の狙いは同時通訳の線であろう。あるいはそこまで行かなくても、速読速解の線である。最初から挙げていたあの英文例1も、文字言語の場合だったら速読速解、音声言語の場合では速聴速解でなければならぬ。それが理想である。ところがペーパー・テストでの試験結果でも、前述の通りに、その理解度においては全くお話にならない程の貧弱な読解能力が多数の学生に見える現状でもある。更にまた今問題にしようとしているこれらの学生の英文の構造整理というものは、語彙的意味を乗り越えた処にある文法的意味の信号がどのように出されているかを自分で納得しながらなされる整理という意味において大変重要な作業であったということになる。そしてまたその作業に沢山の時間を使う（ある意味においてはそうであってもよい。即ち理想的な速読速解にまだ到達していない者にとっては、かなりゆっくりとした解説が行なわれてよい。）というわけでもなく、今実際に紙面に記されたからあのようにスペースを占めることになったわけであって、人間の実際としては頭脳中であのような作業が僅かの秒・分の間に行なわれてしまうわけである。その非常に速い人間の頭脳中での作業を速写フィルムで撮影しておいて、ゆっくり写して見せたり、あるいは瞬時瞬時の各一コマずつを静止写しにして解説に利用するだけのことである。そういうわけであるから、あのような英文構造の整理も常に速読速解と何も矛盾するはずのものではない。

さて、そのどちらの方であってもよいのであるが、筆者は、いつも、かなり長い複雑化した文が出て来て学生が文の筋道の読解に難点を示すような場合は、文はいくら複雑化しようともとにかくその基礎的な処まで見つめて行くと極めて単純素朴な構造<sup>つくり</sup>から成り立っているわけであるから、その素朴な土台を把握出来るような習慣をつけさせようとしている。先に良い例として挙げた整理例（英文例1-2）も普通の授業の時の解説をかなり素直に守って行なった解答例の一つであると思われる。

それでは、英文例1についての筆者の解説方法の説明に入っていくことにしよう。

与えられた文（英文例1）は先ず第一段階として次のような連りが考えられる。（しかもその判断を行なわせるのは母国語人の直観である。それ以外の何

ものでもない。これ即ち「文法」である。しかし今ここでは吾々は英語に対して母国語人ではない、外国人である。そこで母国語人と同一の直観は持たないが、英語をかなり学習してきているということから英語の直観をかなり獲得しているものと考えすることは出来る。)

英文例 1.3 Children <sup>M</sup>↑  
 who are instructed in what to call things and  
 are corrected when they do not name objects  
 in the same way that their parents do  
 (M=Modifier)

その直後に、

英文例 1.4 Children + often come to believe that there are correct  
 names and incorrect names.

という関係が出てくると考えればよい。そして英文例1.3と1.4とから、結局、

英文例 1.5 Children <sup>M</sup>↑ + often come to believe that there are  
 correct names and incorrect names.  
 who are instructed in what to call things and are  
 corrected when they do not name objects in the  
 same way that their parents do

となる。

ここまでの文の筋の整理は極めて大まかなものである。

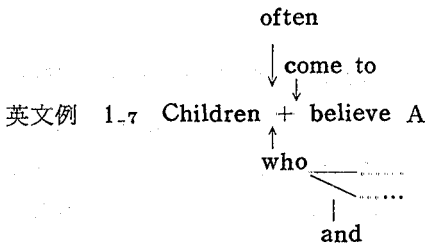
次の段階は、

英文例 1.6 Children <sup>M</sup>↑ + often come to believe A.  
 who are instructed in B  
 and are corrected C

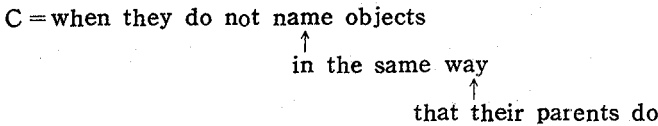
但し  $\left\{ \begin{array}{l} A = \text{that there are correct names and incorrect names} \\ B = \text{what to call things} \\ C = \text{when they do not name objects in the same way} \\ \text{that their parents do} \end{array} \right.$

このA, B, Cは原文そのままの語の連鎖として書いて残しておけばそれだけ繁雑であるので、ある段階での一つの単位としてまとまり易いものをまとめて上げておく為のものである。

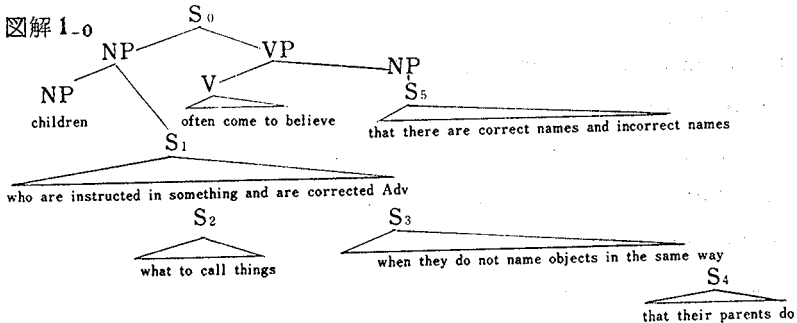
最終的には次のような姿になってしまってもよい。



またCはもっと分析されうる部分を残しているの、次のようになる。



このような分析作業の中に引き入れられると、学生は最初の英文例1の複雑さからその最も素朴な土台の骨組だけのものへと降りて行って根本的な理解を得ることになる。そういう作業に一つの理論付けがなされたものが変形生成文法 (Transformational Generative Grammar) である。それによる分析はかなり大まかに示すと次のようになる。



但し S = Sentence

NP = Noun Phrase: 名詞類を中心語としてその前後から種々の名詞修飾語が磁場のように寄り集って一つのまとまりをなしているもの。

VP = Verb Phrase: 動詞を中心語として動詞修飾語句や動詞補完語句が寄り集って一つのまとまりをなしているもの。

△ = 今のところ更に細分析する必要なく、そのまま大まかに取扱う箇所。

Adv = 副詞類。

今行った図解1-0は変形生成文法の統語理論による枝分れ図 (Branching-Tree Diagram) を用いての文の表面構造 (Surface Structure) 上の分析である。変形生成文法は、色々な文の文法的説明をなす場合、それら吾々が日常使っている文が実はその最も深部まで降りた処にあると仮定される文、即ち深層構造 (Deep Structure) が色々な変形を受けて派生されたものであると説く。従って文の分析に極めて強い力をもつ文法であるが、この英文例1についての学生への解説については、この文の性質上、各細部についての深層構造の細かな分析は解説という作業を繁雑にするのみで不必要である。この文で重要なのは、表面上複雑な文の各部がどのような結びつきにあるかを明示することだけである。後の方で他の文の局所的解説に当っては深層構造まで触れることが必要となることもあるので、深層構造での図解はその折に示すことになろう。せいぜいこの英文例1が深層構造上どのような文から成っているかを示しておく

Children often come to believe something.

Someone instruct children in something.

Someone correct children Adv.

Question + They call things something.

Negation + They name objects Adv.

They have parents.

Their parents name objects Adv.



Names are correct.

There are correct names.

Names are incorrect.

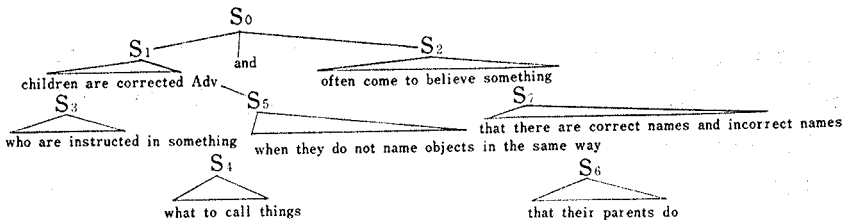
There are incorrect names.

というようなおおよそ11の文であろう。

このような変形生成文法の分析法で前出の諸誤答例の誤答箇所を探るならば次のようになる。

図解 1-1

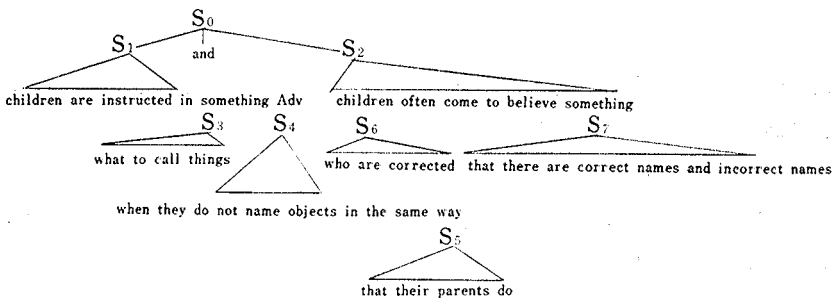
(解答例1-1)



これがこの解答例をなした学生の頭に出来上った文だったことになる。全文 S<sub>0</sub> に対する理解が一つは S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> の関係において、一つには S<sub>1</sub> と S<sub>3</sub> と S<sub>5</sub> の関係において間違いであったことになる。

図解 1-2

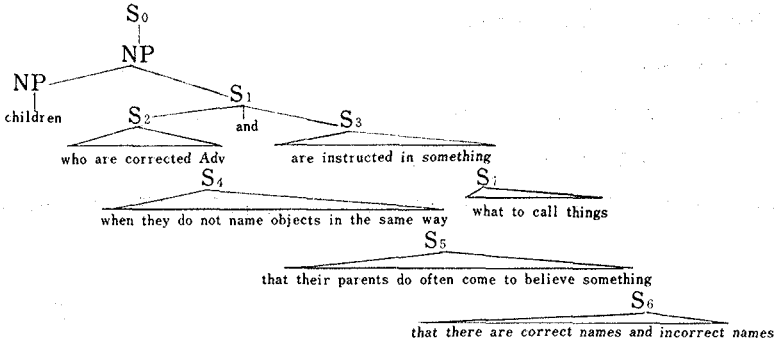
(解答例1-2)



ここでは S<sub>1</sub> と S<sub>4</sub> の関係、S<sub>1</sub> と S<sub>6</sub> の関係が間違いであり、S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> に分れること自体も誤りであった。

図解 1-3

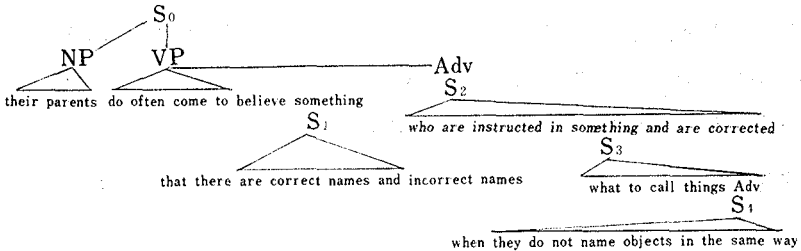
(解答例1-3)



ここでは  $S_0 = NP$  となってしまうことがまず大まかな筋での誤りであるが、 $S_5$  が勝手に造り上げられていること、 $S_2$  と  $S_3$  が逆順序で結ばれたという事等が判然と示されている。

図解 1-4

(解答例1-4)



これは先ず NP と VP との結びつきが誤りであるが、Adv で who を when のように解したりしている。VP と  $S_1$  部分の読解は出来ていたが、NP と VP の結びつきが異常で得点は相殺されたのであろう。

このようにして正解例の図解とそれぞれの点での統語上の色々と異った筋道の誤解が浮彫となる。

## II. その他の点での変形生成文法利用

今まで述べてきたのは、文全体がかなりの長文で非常に複雑化している構造から成っている為に学生が大きな筋道を把握出来にくい場合にどのような解説を、変形生成文法を利用して、行なえるかということであった。

学生の示す難点はその他に、文全体の筋道は複雑でなくて、文のある部分に関することがあるので、ここではそれらの幾つかについて変形生成文法を利用してどのような解説が行なわれうるかについて述べる。今度の場合はその性質上前の場合と比べてかなり細かな分析をも、場合々々の必要に応じて、してよいことになる。

英文例 2 After that, it has an adventurous life till a long chain of circumstances leads to a number of embarrassing questions being asked, and I am compelled to produce the evidence of my guilt from my pocket.

(R. Lynd: *I Tremble To Think* 成美堂)

ここでは下線部が問題になるが、中でも特にその後半部分である。この下線部について学生はどのような読解反応を起すであろうか、till という語は可能性として Prep. であるか Conj. であるかのどちらかである、即ち [+ \_\_\_ NP] か [+ \_\_\_ S] かの性質。次第に次のような整理が頭脳の中で瞬時になされて行ってそのどちらかも反応され、その他の関係も判断がなされて決って行く。

先ず、

2-1 till a long chain of circumstances leads to...  
 $\parallel$   
 X<sub>1</sub>

と整理され、次に、

2-2 till X<sub>1</sub> leads to a number of embarrassing questions  
 $\parallel$   
 X<sub>2</sub>

という整理で理解されてしまい易い。こうなると結局は、

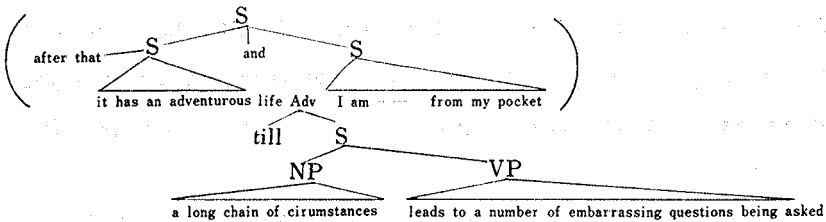
2-3 till X<sub>1</sub> leads to X<sub>2</sub> being asked

というように理解されて、being asked をどのように理解したらよいのかに困ったり、大ていはX<sub>2</sub>に関係する Modifier の Present Participle だという風な誤解に落ちてしまったりする。この後者が日本人の大ていの傾向のようである。そんな風に理解して行ったとしても、直訳的理解段階でそうであっ

て、最終的意識段階においてはもっとまとまった表現に落ち着くのであれば、結果的には大した問題もなかったことになるであろう。

ところがそれは真の理解ではない。ここで英文例 2 の大まかな分析図解を示しておこう。

図解 2



真の理解を反応するように導く為には、そこに性質の異ったもう一つの層が埋め込まれていることに考え方を向けてやる必要がある。即ち、leads to の to は prep. であるからその後N的なものを従える。そのN的なものが 2-2, 2-3 に示されたような X<sub>2</sub> ではなくて、それに更に being asked を加えたもの即ち一つの文的なN的なものという可能性である。

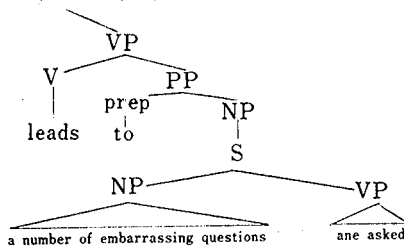
すると結局、

2-4 till X<sub>1</sub> leads to X<sub>2</sub>

ということになってしまう。

それではこの 2-4 の X<sub>2</sub> 部分即ち図解 2 の VP 部分をもっと細かに分析してその構造を示すと次のようになる。

図解2-1



この図解は VP 部分の深部を浮彫にしたもので、prep. である to の後に S (= 文) が埋め込まれていることを示している。この根本の姿からいわゆる吾々の

言葉としての文即ち表面構造が現われるわけであるが、それにはこの to + S の S の処に、この文 S を一つの N 的塊に変える為の変形即ち動名詞化変形が起るのだという解説が可能である。

次の場合は、

英文例 3 His loss of memory is really a tribute to the intensity of his enjoyment in thinking about his day's sport.

(R.Lynd: *I Tremble To Think*. 成美堂)

この文は V = is を中心に出来上った文で、伝統文法的には単文として分類されてきた文であるが、NP とか prep. + NP の型の表現が多く、しかもそれらの N が重要な内容を含んだ N である。その為に簡潔な表現をとっているのがかえって平坦な文意の流れを、日本人にとっては、阻害している結果になっている。この文を学生に解釈なり大意把握なりさせてみると次のようになる。

「彼の記憶の喪失は実際に彼の日の獲物についての考えにおける彼の楽しみの強さへの貢物である。」

このような性質の文の場合にも、変形生成文法の分析法を利用して、その文の深層まで降りてしまつて文を見直してみると、理解をゆきとどかせることが出来る。

この文は、その深層構造まで降りてゆくと、次のような幾つかの文から成っていると考えられる。

S<sub>0</sub> Something is really a tribute to something.

S<sub>1</sub> He loses memory.

S<sub>2</sub> Something is intensive.

S<sub>3</sub> He enjoys something.

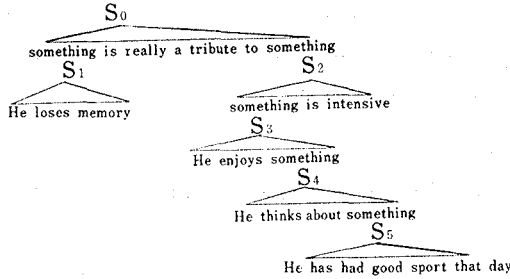
S<sub>4</sub> He thinks about something.

S<sub>5</sub> He has had good sport that day.

これらの文がそれぞれの関係で埋め込まれているのである。そして各段階において各文がその環境に応じた変形をうけて、表面上はただ一つの V 即ち is しも持たぬ文になって現われていることになる。

これらの文の関係を分析図で示すと次のようになる。

図解 3



このようにして各Nの塊となっているものを素朴な文に砕いてみると、最低度からの根本的理解が出来る。それでは、この段階に達した上でのこの英文に対する日本語訳を試みるならば、次のようになる。

「その日は大漁だったなんてことを考えて余り喜びすぎているのが実際はもとになって彼はつつい物忘れしてしまうのである。」

この訳例と先の訳例とを比べてみると、非常な差があることがわかる。前者のはごつごつで分りにくい、後者のはなだらかで分り易くなっている。英語の名詞表現の連鎖は日本語での漢語表現の連鎖に対応しそうで、従って堅い漢語表現をなだらかにするには口語調の日本語を当てなければならぬように、英語の場合は最も基礎的な文表現で換えなければならない。そこが深層構造を求める狙いである。

英文の方もなだらかにして試訳してみると次のようになろう。

He loses memory (又は He gets forgetful) because he too much enjoys thinking that he has had good sport that day.

英文例 4 Having no written language, such tribes have committed no self-revelations to paper.

(R. Benedict: *The Chrysanthemum and the Sword*, Tuttle)

今度の文例は分詞構文関係のものである。この文には次のような派生の過程があると考えられる。

英文例 4.3 Such tribes, such tribes have no written language, have committed no self-revelations to paper.

英文例 4-2 Such tribes, who have no written language, have committed no self-revelations to paper.

英文例 4-1 Such tribes, having no written language, have committed no self-revelations to paper.

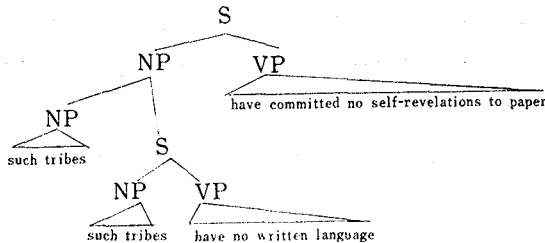
英文例 4-0 Having no written language, such tribes have committed no self-revelations to paper.

4-0 の深層構造が 4-3 である。4-3 では such tribes という同一 NP が 2 つある。そこでそういう条件下では 関係代名詞への変形即ち 4-2 か、同一名詞の削除変形から更に 分詞への変形即ち 4-1 が可能である。4-1 で分詞句が派生されると、その分詞句の位置が転換可能であるので 4-0 が派生される。

以上のことを図解で示すと次のようになる。

図解 4-0

深層構造



適用される形

同一名詞削除変形	— $\emptyset$ —
-ING 置換変形	— <u>-ING</u> —
分詞句位置転換変形	Having no written language, such tribes -----

以上のようなわけで、分詞構文に困難を示すような学生には筆者は必ず母胎文の同一名詞の直後に当の分詞構文を埋め込んで、そこから再出発することになっている。分詞構文についての色々な解説にとって、その方が非常に効果があると思われる。また、そのような操作をやってみてしっかり埋め込めないような場合は、その分詞構文が Dangling Participle であったりして反省の材料にもなるし、又 Absolute Participle だということが分ったりすることも一つの効能であろう。

英文例5 She never met any persons in the house.

(E.A.Poe: *Detective Stories* 英潮社)

今度は二義性をもった文についてである。英文例5は場合々々によって次の二通りの意味に解釈可能である。

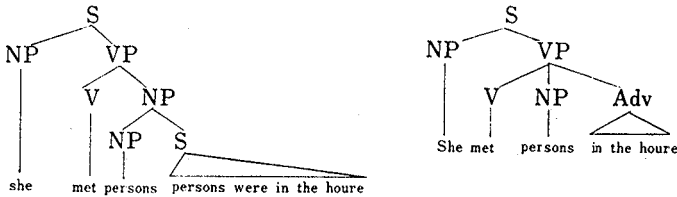
「彼女はその家の人には誰にも会わなかった。」

「彼女はその家では誰にも会わなかった。」

ある文が二様の意味に解釈される場合、その意味の相異を表面の構造上からは、非常に明確には、説明しにくい。その文の深層構造においてどのような相異点がある為に、表面上は一つの姿をしている文が、二様に分れた意味を隠しもつということが起ってくることになる。そこでこの英文例に内在する二様の意味を表わす本になっている構造を分析図解で示せば次のようになる。

ここでは事を極めて簡単に、純粹にする為に、元の文から否定要素 **never** を、従って **any** をも、差引きししばらく別の処に置いた上で図解することにする。適当な段階で意味に戻して考えればそれでよい。そこで英文例5を次のようにした上で分析する。

[never, any] + [She met persons in the house]



ここでの二義性を生み出す本は、in the house なる句が、一方では VP 内の V に関する Adv であるのと、もう一方では VP 中の NP に関する 関係詞節が変形されて起った形容詞句であったことになる。